

Care & Communication

ケア&コミュニケーション



DENTAL REPORT

口腔外科の専門性も活かし
地域住民の口腔衛生の
向上に力を入れる

医療法人再生会
あいざわ歯科クリニック 理事長
相澤 八大 先生

P01-06



INSIDE REPORT

夫婦で力を合わせ、
治療から予防と美しさへ
患者の意識を変える

医療法人令成会
ふるやしき歯科 院長
古屋敷 努 先生

ふるやしき歯科 副院長
古屋敷 有子 先生

P07-12



DOCTOR'S TALK

徹底した感染予防と
妥協なき治療で
歯を生涯にわたって守る

デンタルクリニックK 院長
渥美 克幸 先生

P13-18



THE FRONT LINE

インプラントを中心に
高精細の治療を提供する
都市型歯科医院

Astratech Implant System 症例紹介

オーラルデントクリニック 院長
前田 貢 先生

P19-26



車椅子でも上りやすい
ゆるやかなスロープもあるエントランス



ホテルのフロントのような受付



待合室の窓側には1人掛け椅子が並ぶ

口腔外科の専門性も活かし 地域住民の口腔衛生の 向上に力を入れる

山梨県甲府市の「あいざわ歯科クリニック」は、開業から20年。インプラントを中心に口腔外科の専門性を活かしながら、地域医療の向上に力を尽くしている。



医療法人再生会
あいざわ歯科クリニック 理事長 相澤 八大 先生

公園隣接の立地を活かす ゆとりある移転新築

「あいざわ歯科クリニック」は、JR南甲府駅から車で10分ほどのスポーツ公園のすぐそばにある。開業は2003年。2022年11月に600mほど離れた現在地に移転新築した。

新たに歯科医院を建てるにあたり、相澤八大理事長は、「すべてにこだわりました」と話す。

敷地は390坪あり、2階建ての1階が歯科医院になっている。看板を形作るサメは、歯科医院のシンボル。玄関に敷かれた足拭きマットには、相澤理事長がデザインしたサメが描かれている。

広々とした診療室に備えられたユニットは7台。そのうち5台のユニットを仕切るパーテーション間の幅は約2.5mもあり、ゆったりとした空間で治療が受けられる。「ワンフロアが広い歯科医院の場合、ユニットを個室にする方法もあると思います。ただ、うちの歯科医院は、歯科医師が私一人です。すべての患者さんにしっかりと目が行き届く診療を考え、ユニットの周囲にゆとりを持たせ、パーテーションで仕切る設計にしました」

患者が待合室から診療室に入るときは、廊下を通して扉を開け、ユニットに座る動線にしている。医療側の動線とは分ける形だ。

ユニットを仕切るパーテーションが高いこともあり、患者からは、「プライバシーが守られる個室にいるよ

う」と好評だそうだ。

あいざわ歯科クリニックは一般歯科として、虫歯や歯周病など、さまざまな症例の患者を受け入れているが、相澤理事長の専門は口腔外科だ。自身の患者はもちろん、他の歯科医院からの紹介で、年間150本のインプラント手術や口腔外科の手術を行うケースも少なくない。そのため、診療室の一角には、設備が整った手術専用の個室も備えられている。また、メンテナンスや定期健診用の個室も、治療用ユニットのスペースと区分し、廊下を挟む配置で設けられている。

「公園に隣接していることもあり、待合室から続く廊下に面した窓を大きくし、患者さんには樹木の緑を感じながら、診療室に入っていただくように工夫しました。待合室も1人用の椅子だけでなく、電源のコンセントがあるカウンター席を設け、患者さんに待ち時間を有効に、快適に過ごしていただくように気を配っています」

インプラントへの興味から 歯科医師を志す

相澤理事長が歯科医師を目指したのは、高校時代にインプラント治療の存在を知ったことからだった。

「医療分野への進学を考えていたとき、たまたま新聞でインプラントに関する記事を読んだんです。義歯かブリッジしか選択肢がなかったところに、第3の選択肢とし



公園に面した診療室の半個室タイプのユニットサイド

てインプラントが登場したことに興味を持ちました。まだ始まったばかりでしたが、新しい医療という点に可能性を感じたんです」

それに加え、相澤理事長は、子どもの頃から手先が器用だった。大学の受験時は、医科大学にも合格したが、「これからの分野で自分の力を発揮してみたい」という思いが、相澤理事長を歯科の道に進めさせることになった。

相澤理事長は、北海道大学歯学部を卒業後、山梨県に戻り、地元の大型歯科医院で勤務医として働き始めた。それと共に、インプラントと口腔外科の研鑽を積むため、東京医科歯科大学歯学部での勉強も続けた。さらに山梨大学医学部の麻酔科でも研修を受けている。「私が勉強を続けていた頃は、医師の専門が細分化し始めた時期でした。山梨大学では医科の先生と接する機会も多かったのですが、専門が細分化されていく医科の状況を間近で見たことで、口腔内のすべてに関わることができる歯科医師のやりがいあらためて感じました」

大学での勉強や勤務医の経験が積み重なるに従って、自身の歯科医院を持つという開業への決意は徐々に固まっていった。最も大きな後押しになったのは、「自分が理想とする環境で納得できる治療がしたい」という思いだった。

そんなとき、ある人との出会いがあった。歯科治療のため、相澤理事長のもとに通院していた子どもの親が内科医だった。雑談の合間に開業を考えていることを相談すると、その人は「ぜひ私の隣の土地で開業なさい」と言った。そして、話がトントン拍子にまとまり、最初の開業地で自身の歯科医院を持つことになった。「思わぬ出会いが開業につながったことを考えると、私の人生は運が左右していると感じることもあります。開業したばかりの頃、このあたりは田畑が多く、住宅は本当に少なかったんですが、20年経った今はかなり増えました。じつは甲府市内で一番の人口増加地域なんです。たまたま私は縁があり、この地で開業しましたが、患者さんにも恵まれ、運がよかったと思っています」



マイクロスコープや大型モニターを備えた手術室



患者は受付から廊下を通して診療室に入る



ユニットサイドの一角がカウンセリングルーム

滅菌・消毒、空調など 細部までこだわった院内

あいざわ歯科クリニックで、特筆したいのが、徹底した院内感染予防対策だ。滅菌・消毒コーナーは、広く取った通路を挟み、パーテーションで仕切られたユニットの対面にある。複数のスタッフが十分に動ける広さを持つ、このスペースには、相澤理事長や歯科衛生士が歯科技工ができる設備も揃っている。

「クラスBの滅菌器を2台、ミーレのジェットウォッシャーを2台、備えました。滅菌・消毒済みの器具を保管するボックスは、両サイドから収納しやすく、取り出しやすいように薄型にしています」

換気の流れにも気を配った。ユニットがある半個室の扉の上部を開けているのも、空気の通り道を確認するためだ。公園に面した窓を開けて換気すると、森林のそよ音が漂い、院内は森林浴をしているようなさわや

かに包まれる。

「空調でこだわった点を数えるとありすぎるくらいですが、一言で言えば、院内の空気全体が外へと出ていくように工夫しました。また、トイレを2つ設けたのは、患者さん用と診療中のスタッフ用を分けるためです。スタッフの専用トイレは、スタッフルームの前にも設けました。新しい歯科医院を作るときにこだわったところは、数え上げるときりがないほどです。CTは超高分解能画像が撮影できる機種を選びましたし、手術室にはマイクロスコープも完備しました。コンセントの位置まで、最も使いやすい高さを測って決めたくらいです」

あいざわ歯科クリニックの診療室は、整理整頓も行き届き、大きなカルテ棚も美しく収納されている。相澤理事長のもと、スタッフたちに医療人としての、しっかりとした意識が根づいている現れとも言えるだろう。

もう一つ、特徴的なのは、SNSを活用しての情報収集だ。相澤理事長は既知の歯科医師はもちろん、Facebookで知り合った歯科医師とのコミュニケーション



ユニットサイドの向いにはスタッフの動線を活かした効率的な医療準備スペースがある

ョンを通じて、最新の医療情報を敏感にキャッチするようになっているという。

全顎治療の方針と 働きやすさを重視

あいざわ歯科クリニックには近隣だけでなく、高速道路を利用して通院するなど、数多くの患者が通院している。年齢も、小児から高齢者まで幅が広い。甲府市は車を利用する人が多いこともあり、患者はよりよい治療を求めて、広い範囲で歯科医院を探す傾向があるという。「私の歯科医院では、フルマウスリコンストラクション、つまり全顎治療を診療方針の基本としています。勤務医時代、患者さんの希望を受け入れて1か所だけ治したものの、再治療が必要になるケースをたくさん見してきました。自分の歯科医院では、そうした事例を作りたいと思ったのです。全顎治療を基本にしていることは、初診から早めの段階で、ご説明しています。伝え方も工夫していますね。最初から詳しく説明すると、患者さんが驚いてしまうので、通院を重ねるなかで、理解を深めていただくようにしています」

あいざわ歯科クリニックでは現在、10名の歯科衛生士と5名の受付兼歯科助手が働いている。

歯科衛生士は、つねに2人体制でユニットにつき、施術をしている。スタッフにベテランと経験の浅い歯科衛生士が混在しているため、患者によって対応の差が出ないようにという配慮からだ。

また、治療方針についても、たとえば今後、自費治療の可能性がある場合、まずは歯科衛生士が説明する。最初から相澤理事長が説明してしまうと、患者は受け入れなければならないというプレッシャーを感じやすいからだ。

「のんびりとした土地柄ですから、患者さんの気持ちに寄り添ってコミュニケーションを図っています。患者さんの微妙なニュアンスをキャッチできるのも、故郷で歯科医院を経営する強みだと思っています」

じつは、あいざわ歯科クリニックには、薬剤師もいる。相澤理事長の奥様だ。事務長との兼任で常勤している。「たまたま妻が薬剤師だったので働いてもらっているのですが、基礎疾患を抱えている患者さんもいますし、服用中の薬など、すぐに相談できるのは助かります。同時に事務長として運営の柱でもあり、心強く思っています」

大所帯の歯科医院だけに、相澤理事長はスタッフの



滅菌器などがフル稼働する消毒・滅菌スペース



CTを備えたレントゲン室



両側から器具類を取り出せる薄型の収納棚



シンボルのサメがあしらわれた玄関マットと看板

働き方改革にも取り組んできた。とくに力を入れたのが、勤務時間を守ることだ。家庭や子どもを持つスタッフも多いため、診療終了後は、素早く退勤できる体制を整えている。

歯科衛生士を育てたいと、あいざわ歯科クリニック独自の奨学生制度も設けた。これまで3名が受けている。

相澤理事長は珍しい両手きき。両手を使って治療をしているため、その技術を直接、勤務医に教えるのは「難しい」と相澤理事長は話す。しかし、今後はノウハウを含め、継承を考えた歯科医院運営に舵を取っていきたいと考えている。

「当面は歯科衛生士が活躍できる場をもっと広げたいと考えています。より精密な治療にも力を入れていき

るので、患者さんのニーズとのバランスをとりながら、これまでと変わらず、誠実な治療を提供していきたいと考えています」



スタッフのみなさん

PROFILE

相澤 八大 先生

- 1995年 北海道大学歯学部卒業 ●1998年 東京医科歯科大学歯学部専攻生 ●2000年 山梨大学医学部麻酔科研修生 ●2003年 あいざわ歯科クリニック開業 ●2006年 医療法人再生会設立。理事長に就任
- 2022年 あいざわ歯科クリニックを移転新築 ●日本歯科麻酔学会認定医 ●日本口腔インプラント学会専門医 ●日本口腔外科学会 ●日本矯正歯科学会 ●東京形成歯科研究会理事

医療法人再生会 あいざわ歯科クリニック 山梨県甲府市小瀬町 550-4 TEL:055-242-2118 HP:<https://www.aizawa-dc.jp/>



夫婦で力を合わせ、 治療から予防と美しさへ 患者の意識を変える

熊本県荒尾市の「ふるやしき歯科」は、夫婦で力を合わせ、開業21年になる歯科医院だ。予防とアンチエイジングにも力を入れ、患者を笑顔にしている。

医療法人 令成会 院長 古屋敷 努 先生
ふるやしき歯科 副院長 古屋敷 有子 先生



子どもができたことを機に 開業を決意

「ふるやしき歯科」があるのは、水鳥の重要な生息地として国際的な保全を求めるラムサール条約湿地に登録された荒尾干潟の近く。田畑も広がる自然豊かな地域だ。

古屋敷努院長と古屋敷有子副院長が開業したのは、2002年のこと。きっかけは、有子副院長の妊娠だった。「開業前の私たちは、隣の市にある大型歯科医院に勤務していました。じつは、妻との結婚も、同僚として働いていたことが縁になったからです。働きやすいクリニックだったので、ずっと勤務医でもいいと思っていたのですが、結婚7年目に妻の妊娠がわかりました。将来を考えたとき、勤務医では退職の頃が、子どもがまだ学生かもしれない時期に当たります。そこで、長く働ける環境を作るため、開業を決意しました」(努院長)

開業の場所は、開業より5年ほど前に取得した土地を利用することにした。地元出身の有子副院長の父に勧められ、購入していた土地だ。取得した頃は、開業を具体的には考えていなかった。しかし、目の前に市立病院があり、路線バスの便がよく、市内でも車の交通量が多い場所だ。歯科医院の開業には、最適の立地だった。

「1階を歯科医院、2階を自宅として建てました。将来、増設できるように配管はユニット6台分の設計にしましたが、実際に設置したユニットは4台です。銀行から融資を受けることはできたものの、自己資金が乏しかったものですから、借金からのスタートでした。開業時のお話をすると、ネガティブなエピソードばかりです」と、努院長は笑う。

それを受けて、有子副院長は、「開業は大変でした。でも、おかげさまでオープン時から患者さんがたくさん来院してくださったので、翌年にはユニットを1台増やすことができました。順調に成長することができてよかったです」と、努院長の言葉を引き継いだ。

その後もふるやしき歯科は、患者数が伸び、簡易的な手術もできるスペースを設け、ユニットを1台増設。6年を過ぎた頃には1階だけでは手狭になった。そこで、自宅を別の場所に移動し、2階を診療室に改築。3台のユニットを備えた。現在は、これら9台のユニットで診療している。

副院長の闘病から 健康と美の両立に目が向く

「うちは本当に普通の歯科医院なんです。取材に来ていただいているのかなと思うくらい」と話す有子副院長



バリアフリーの落ち着いた雰囲気を受付

だが、診療が終わり、待合室に戻った患者を追いかけ、親身にアドバイスする姿を見ると、患者から厚い信頼を得ている理由がよくわかる。

現在、ふるやしき歯科が診療する患者数は、1日70～80名。その半数は、メンテナンスの患者だ。総勢20名のスタッフのうち、10名の歯科衛生士が担当している。

治療の患者は、努院長と有子副院長でとくに症例の担当をわけてはいない。自費治療が必要になる矯正やインプラント、標準的な予約時間で可能な治療を2人で分担している。

「開業からしばらくは、虫歯治療の患者さんがほとんどでした。急患も無理をしながら受け入れていたので、予約の患者さんを待たせてしまうこともありました」(努院長)

努院長と有子副院長は開業を決めたとき、一人ひとりの患者と向き合い、治療が終わってからは予防に移行し、長く付き合える歯科医院を思い描いていた。しかし、現実には、1日90名以上が受診することもある患者の受け入れで精一杯だ。診療方針と院内オペレーションを変える必要があった。

そんなとき、思いがけない事態が起こる。有子副院長

の病気が発覚したのだ。急激に痩せたことから、病院を受診したところ、婦人科の病気が見つかった。

そして、39歳で子宮と両卵巣の全摘手術を受けた。その後、ホルモンバランスが安定しなかったことから、有子副院長は体重が減り、肌が乾燥し、シワも増え、体調のすぐれない日が多くなった。そんな有子副院長を見かねて友人が勧めたのが、ほうれい線へのヒアルロン酸注入だった。

「わずかな量の注入だったんですが、口元がピッと上がったんです。表情が明るくなったことが本当にうれしかったです。それだけでなく、咬合などの歯科疾患が原因のものであれば、歯科医師でも可能な施術ということを知りました。自分の体験をきっかけに歯科と美容の関係をもっと勉強したいと思うようになったんです」(有子副院長)

有子副院長は美容分野の勉強に熱を入れるようになった。国内のセミナーだけでなく、モナコや韓国などの美容先進国でも学んだ。

そうした経験から、今では歯科医師を対象にした開業医目線のヒアルロン酸注入、ボツリヌス注入のセミナー



患者の様子がわかりやすい開放的な診療室

講師を務めて10年以上になる。

「ただ、ほうれい線が深いなどの悩みを相談してくる患者さんは、奥歯に問題を抱えていることが多いんですね。ですから、まずは欠損した奥歯や噛み合わせなどを治療し、健康な口腔にすることを一番考えます。その上で、ヒアルロン酸注入やボツリヌス注入を希望する方にはしっかり説明した上で注入をしています。この患者さんはヒアルロン酸を少し注入したほうが、顔のラインがより美しくなると思うこともありますが、私のほうから施術を勧めることはありません」(有子副院長)

ボツリヌス注入には筋弛緩作用があるため、顎関節症で悩む患者から「楽になった」という声が多く寄せられているようだ。

患者との向き合い方を変えた 予約システムの導入

ふるやしき歯科が転換期を迎えたのには、前述のように、有子副院長の病気が大きく影響した。健康の

大切さを痛感した努院長と有子副院長は、治療に追われるのではなく、患者の健康を重視した診療に取り組もうと、開業時の理想に立ち戻ることにした。

そして、そのために変えたのが、予約システムだった。それまでは、予約表に手書きで記入する方法を取っていた。しかし、それでは予約時間の全体像がわかりにくい。予約の重複などのミスも起こりやすかった。また、「この時間が少し空いているから」と急患を入れたことで、慌ただしく何人もの患者を同時に治療しなければならないこともあった。

そこで、コンピュータによる予約システムを導入。チェア別に色分けされ、誰がどの時間帯にどのチェアを担当し、どんな治療、あるいはメンテナンスをするのかが表形式で一覧化された。予約の全体像が一目でわかるようになった。

「システムを導入したのは、8年ほど前です。導入したことで、9台のユニットのうち、3台をメンテナンスの歯科衛生士専用固定できるようになりました。情報は受付のパソコンだけでなく、タブレットでも共有しているので、無理な予約が入ることもありません。院内のオペレーシ



明るい自然光が入り、木目調を活かしたユニットがある診療スペース



ョンがスムーズに進むようになりました」(努院長)

それに加え、予約数を調整した。以前は、無理をしても急患を受け入れてきたが、予約患者の優先を徹底するようにした。

「患者さんに希望されれば、なんでもやってあげたいと思う性格なので、急患の患者さんを断るときは、今も心苦しく感じています。でも、患者さんをとにかく受け入れる体制では、歯科医師もスタッフもつらいですし、患者さんにも不満を感じさせてしまいます。それよりも、予約時間に予定の治療やメンテナンスをしっかりと行ったほうが、患者さんの健康と将来のためになる、と私たちの意識を変えたのです」(有子副院長)

患者と向き合う時間ができたことで、好循環が生まれ、自費診療を選択する患者が増えてきた。有子副院長が手がけるアンチエイジングの施術も、そうしたゆとりのある会話から関心を持つ患者が現れるようになっていったのである。

意欲的な研鑽の姿勢が 患者の意識への好影響に

ふるやしき歯科は、歯科医師や歯科衛生士などのスタッフと患者の距離が近く、親しげな会話が交わされ、地元密着型の歯科医院ならではの魅力にあふ

れている。その空気を作り出しているのは、努院長が自費診療まで幅広く歯科治療の基礎を支え、有子副院長が意欲的に新しい分野に取り込むパワーを発揮しているからだ。

「妻が『これをやりたい』と話すときは、腫がきらきらして、とても前向きです。その表情を見ると、できるだけ応援したいという気持ちになります」(努院長)

今、2人が生涯を捧げようと決意しているのが、矯正治療だ。きっかけは、保田矯正塾の保田好隆先生との出会いだった。2人は衝撃を受けた。

「保田先生の教えを受けてから、鼻呼吸へ導いた患者さんが真の健康を手に入れた姿を目の当たりにすることになりました。心から歯科医師冥利に尽きます。また、大学で学んだ根管治療しか知らなかった私です。エンドのパイオニア、山田邦昌先生のセミナーにも通い続けています」(有子副院長)

そのおかげで、ふるやしき歯科では、マイクロスコープを使った治療も可能になった。

「もう一つ、学んでいるのがNd:YAGレーザーの治療です。東京の行田克則先生のセミナーを受けています。私の学び方は、先生の指導を素直に実践すること。Nd:YAGレーザーも行田先生が歯根破折の治療に使われているのを目の当たりにして感激し、すぐに導入しました。うちの患者さんにも行田先生に教えられた通りに治療してみると、予後がよく、患者さんから



増設したユニットがある2階の個室タイプの診療室

の評判がよかったのです。もちろん、行田先生の技術にはまだまだ及びませんが、私の治療の幅が広がることは、結果的には患者さんのためになります。もっと知識と技術を吸収したいと思っています」(有子副院長)

努院長と有子副院長の歯科治療に対する意欲的な姿勢は、患者の意識にも影響を与えた。痛いところだけを治してもらえばいいという患者が減り、定期的なメンテナンスで長く自分の歯を守りたいと考える患者が増えてきたのだ。

「特別なことは何もしていない」と話す努院長と有子副院長だが、患者の意識が変化してきているのは、予約がリピーターの患者で埋まっていることからわかる。新規患者の受け入れが、数ヶ月待ちになっているほどだ。「初診を待ってくださっている患者さんをどう受け入れていくかが、これからの課題です。勤務医の先生もいますが、スタッフの負担を考えると、なかなか簡

単に予約枠が増やせないのです。そこが悩みどころですが、これからも、お子さんからお年寄りまで、どの世代の歯もしっかりと守れる歯科医院でありたいと思っています」(努院長)



古屋敷努院長(前列左から4番目)と古屋敷有子副院長(前列右から4番目)、スタッフのみなさん

PROFILE

古屋敷 努 先生

●1994年 鹿児島大学歯学部卒業 ●2002年 ふるやしき歯科開業

古屋敷 有子 先生

●1993年 福岡歯科大学歯学部卒業 ●2002年 ふるやしき歯科開業

医療法人 令成会 ふるやしき歯科

熊本県荒尾市増永1864-5

TEL:0968-69-1181

HP:<https://www.furuyashiki.com/>



増改築で白く明るい空間の受付



新たに設けられた待合室



左側の白い建物が増設された部分

徹底した感染予防と 妥協なき治療で 歯を生涯にわたって守る

埼玉県川口市にある「デンタルクリニックK」は、今年1月に増床改築を終えたばかり。歯を守るため、感染対策と精密な治療に取り組む理由を伺ってみた。



デンタルクリニックK 院長 渥美 克幸 先生

歯科技工士の父の助言を 機に開業を決意

「デンタルクリニックK」は埼玉高速鉄道線の川口元郷駅から徒歩5分ほどの交差点の角にある。渥美克幸院長が開業したのは、2010年のこと。

「開業を決めたのは、歯科技工士だった父からの助言がきっかけです。その頃の私は、自分の歯科医院を持ちたいという意識が薄く、勤務医のままでいいと思っていました。そんな私を父は見抜いていたんですね。『ここで落ち着いたら、先々が大変になる。将来を考えなさい』と言われ、目が覚めました」

開業地は最初から地元の川口で、と決めていた。駅から歩ける距離に開業地を探したが、JR沿線は地価が高く、難しい。2001年に開業した埼玉高速鉄道線の駅をめぐり、縁あって現在地を取得することができた。「父と一緒に仕事をすることも想定していましたが、自分の診療方針から考えても、歯科に関わるすべての機能が備わっている施設にしたいと思いました。でも、私の理想を実現するには、取得した土地の倍のスペースは必要だったんですね。実際に診療を始めてから、そのことを痛感しました」

残念ながら、開業を勧めた父は2009年に亡くなってしまったが、渥美院長が歯科の道を選んだのは、父の働く姿を見て育ったことが大きく影響している。

「歯科業界に対して明確なイメージはありませんでしたが、父が歯科技工の仕事をする姿から、『面白そうな仕事だな』と感じたのです」

歯学部に進学し、歯科医師となり、勤務医としての経験やスタディグループ「JIADS」の勉強を通して、徐々に自分の歯科医院の理想像が固まっていった。なかでも影響を与えたのが、訪問診療で高齢者の口のなかを診る機会を得たことだった。

その頃は、インプラントや審美歯科など、口のなかを大きく変える技術が広まっていった時期だ。しかし、渥美院長は、歯科医師として大切なのは、一生にわたり、咀嚼できる機能を維持する治療を行うこと。そのためには、再治療を繰り返すことなく、自分の歯を長持ちさせる確かな技術と知識を備えることが必要であることをJIADSのセミナーで学んでいた。そして、訪問診療を通じて、その歯科の本質を肌で感じていた。

「訪問診療を経験すると、歯科医院に通院してくださる患者さんが当たり前ではないことに気づかされます。通えない方もいるのです。でも、その患者さんたちも、元気な頃は歯科医院に通っていたはず。通院していた頃に適切な治療を受けていれば、介護が必要になってからも、咀嚼が難しい状態にはならなかったはず。この経験が、一生、口腔機能が維持できる治療をしよう、一つひとつのステップをきちんと踏み、やり直しが少なく、長持ちする治療をしよう、という私の診療方針を築くことにつながりました」



以前は1階と2階に分かれていた診療室を2階にまとめた

感染予防に力を入れた 増床改築で倍の面積に

開業から13年経った今年、デンタルクリニックKは、隣接する土地が取得できたことから、渥美院長の念願だった増床改築を行った。診療を続けながらのリニューアルとなり、1月のトライアル期間を経て、2月から本格的に稼働している。

改築は、西側に新たな建物を加える形になった。1階は自動釣銭機を備えた受付と待合室、歯科技工室、スタッフルームの医局、2階は7台のチェアを備えた診療室、3階はセミナールームと事務室になっている。また旧棟に加え、増築した西棟にもエレベーターを備え、バリアフリー環境も整えた。内装はシンプルで、院内の案内板も文字が大きくわかりやすく、医療機関として必要な機能に徹していることがよくわかる。「改築では、スペースを贅沢に使うことと動線の改善を重視しました。診療室でいえば、以前はユニットが1階

の個室に1台、2階に3台ありましたが、改築で4台増やし、2階に7台のユニットを置いています。治療に関わる設備をワンフロアにまとめ、患者さんと医療側が動くルートを分けたことで、動線が改善しました。スペースを詰めれば、ユニットをもっと増やせたと思いますが、動線分離にこだわったのです」

改築計画がスタートしたのは、コロナ禍の最中。もともと滅菌・消毒の設備など、院内感染の予防には力を入れていたが、改築では、その環境を充実させた。「ミーレのジェットウォッシャーやクラスBの高圧蒸気滅菌器を備えたり、3種類の電解水の使い分け、食品衛生基準をクリアしたコンプレッサーの使用など、治療に関わる機器は、以前とそう大きくは変わっていません。増築で力を入れたのは、24時間換気する院内全体の空気清浄です。旧棟だけのときも空気清浄機を置いたりしていましたが、より徹底したかったのです。換気設備は建物を建てる段階で組み込まないと、実現できませんから」

また、労働環境も改善させた。スタッフルームを広く



数台のモニターを設置した手術用の半個室



全ユニットにマイクロスコープを設置



白い清潔感のあるオペエリア

し、男性用と女性用に分け、女性専用トイレも設けた。3階の大部分をセミナールームにしたのも、ミーティングの際、スタッフ同士の距離が近くなりすぎないように、との配慮からだ。

「新型コロナウイルス感染症が5類になり、収まってきたように見えますが、現実とはありません。また、新型コロナウイルス感染症が終息しても、また新たな感染症が流行する可能性は十分に考えられます。そうした将来を考えての改築でした。これから開業や改築を考える先生方にも、ユニットを増やすことより、院内感染の予防に力を入れたほうが、将来につながることをお伝えしたいです」

増床改築は患者にも好評だった。多くの患者に「おめでとう」と声をかけられ、渥美院長はほっとしたという。

マイクロスコープの増設が スタッフの意欲を引き出す

現在、デンタルクリニックKの1日の来院数は、約

30～40名程度。治療とメンテナンスの比率は1対1。保険診療に比べ、自費診療の割合が高い。また、他院からの紹介や患者の口コミで近隣以外の患者も訪れている。一方で、キッズクラブを設けるほど、子どもの患者も多い。

スタッフ数は14名。常勤の勤務医が2名、歯科衛生士が7名、歯科助手が3名、渥美院長の奥様が事務、義母がクリーンスタッフを担当している。

開業から順調に成長しているデンタルクリニックKだが、振り返ると、いくつかの悩める時期もあった。開業から半年過ぎた頃には、東日本大震災が起きた。建物や人的な被害はなかったが、計画停電の区域になり、歯科材料や消耗品が入手しにくい状態がしばらく続いた。

「東日本大震災が最初に受けたインパクトでした。ただ、それ以上に今も悩んでいるのは、人材教育です。院長は、経営の勉強をすることなく、経営者になります。人を導く自信もないまま開業したので、少しずつ学ぶしかありませんでした」



3階にある広々としたセミナールーム。スタッフのミーティングや研修にも使用される

渥美院長は、「歯科医師と社会人の基本姿勢を、勤務医時代とスタディグループのJIADSで学んだ」と話す。1人の人間として患者に誠実に接することももちろん、歯科機器や材料メーカーの担当者やディーラーを大切にすることを学んだという。

「歯科医院は歯科医師だけでは運営できません。患者さん、スタッフ、医療環境を整えてくれる業者さんの存在があってこそ成り立ちます。そうしたコミュニケーションの基本を勤務先、JIADSセミナーの受講や先生方のお手伝いをしたこと、またインストラクターを任されたことを通じて教えていただきました」

それらの学びを得て開業した渥美院長だったが、労働環境や教育体制で試行錯誤をすることになった。とくに悩んだのが、退職をどう減らすかだった。歯科医師の補佐ではなく、自主性を持って働くスタッフに育ててほしい。しかし、その気持ちがなかなか伝わらなかった。

転機はマイクロスコープを2台体制にしたときに訪れた。最もベテランの歯科衛生士に「使ってみないか?」と声をかけたところ、熱心に取り組んでくれたのだ。

「それまでルーベは使っていましたが、ベテランの歯科衛生士がマイクロスコープを使いこなす姿を見て、他の歯科衛生士も興味を持つようになったんです。メイ

ンテナンスの精度が上がることで、自分たちの仕事の面白さに目覚めたんですね」

今回の改築では、7台のユニット全部に渥美院長が使っているマイクロスコープと同じ機種を備えた。歯科衛生士用モデルは倍率が低く、じつは初心者には扱いにくいそうだ。低スペックのものでは、勉強する意欲がそがれてしまう。それを避けるための英断だった。

全員での情報共有で 診療の質の向上に注力

今のデンタルクリニックKは活気にあふれている。診療に前向きにアイデアを出すだけでなく、院外活動にも取り組んでいる。歯科衛生士が知人の助産師から頼まれたことをきっかけに、保育園で歯科教室を開いている。

「私もたまに歯科教室に顔を出しています。歯科医院を飛び出して、地域とコミュニケーションを取るのはいいことです。スタッフにとっても、自分の資格が社会に役立つことを実感できる、いい機会になっています」

意欲を引き出している工夫の一つは、毎週1回、午後に行われている院内ミーティングだ。ミーティングは、渥



2階にある消毒・滅菌スペース



CTも完備している

美院長が進行役になり、その前の1週間のインシデント・アクシデント・ノートの読み合わせから始まる。次に初診患者のデータから何を考えるべきなのかを話し合う。トラブルに対しても、ロールプレイングで対応策を考える。

もう一つは資格の取得だ。デンタルクリニックKに就職すると、すべてのスタッフは入社から2年が終わるまでの間に第二種歯科感染管理者の資格を必ず取るようになっていく。

「全員で情報を共有していかなければ、組織は絶対によくなりません。インシデント・アクシデント・ノートは、率直に書いてもらうことが大切です。ですから、内容に関して罰することは決してしません。そういったことも、ミーティングではつねづね話しています」

また、女性が多い職場だけに、勤務時間の遵守も大切にしている。午後を休診にして、院内ミーティングにあてているのも、その現れだ。

じつは今回の増床改築には、スタッフたちの働く環境を広げたいという狙いもあった。産休や育休制度を整えても、休みが明けたときに戻る場がなければ、制度が活かされない。組織に柔軟性を持たせるには、ある程度の規模が必要だった。

「歯科の仕事は、ある程度の年数をかけた臨床経験が

必要です。せっかく育ったスタッフが戻ってこられる場を確保したかったのです。成長曲線は人それぞれですが、そもそも私が一緒に頑張りたいと思って採用したスタッフばかりですし、全員が自らの課題に対して真面目に取り組んでいる姿を見ると、とてもうれしくなります」

増床改築という新たな節目を迎えたデンタルクリニックKを、これから渥美院長はどのように成長させたいと考えているのだろうか。

「私は、自分自身がなるべくすべてのコントロールをしたいというタイプです。分院を作るなどの拡大路線より、今は医療技術や院内オペレーションの質を上げることに注力したいです」



渥美克幸院長(前列中央)と、スタッフのみなさん

PROFILE

渥美 克幸 先生

- 2002年 長崎大学歯学部歯学科卒業。医療法人社団歯友会赤羽歯科勤務
- 2010年 デンタルクリニックK開業
- 2023年 デンタルクリニックKを増床改築
- 長崎大学歯学部非常勤講師
- 日本接着歯学会専門医・指導医
- 日本顕微鏡歯科学会認定医
- 日本医療機器学会認定 第2種滅菌技士
- JAOS認定 第一種歯科感染管理者
- 日本口腔機能水学会認定医
- JIADS常任講師(エンドコース・ペリオコース)

デンタルクリニックK

埼玉県川口市末広1-2-13 TEL:048-229-1777 HP:https://www.dck2010.com/



インプラントを中心に 高精細の治療を提供する 都市型歯科医院

東京都港区にある「オーラルデントクリニック」は、
インプラントを中心に一般歯科も行う都市型歯科医院。
コロナ禍の開業からこれまでの歩みを伺ってみた。



オーラルデントクリニック 院長 前田 貢 先生

開業を決意した 理想のテナントとの出会い

「オーラルデントクリニック」があるのは、東京タワーも間近に見える、都営地下鉄御成門駅から徒歩0分のオフィスビル。床面積が37坪ほどの1階にある。ユニット数は5台。手術用の個室に加え、一般歯科やメンテナンス用の4台が、高いパーテーションで仕切られた半個室に備えられている。

開業は2021年。前田貢院長が開業準備を始めたのは、その1年ほど前からだ。

「開業をするなら、働いていた東京慈恵会医科大学の近くがいいと考えていました。ただ、このあたりは、都心でも大企業が集中するオフィス街なので、1階にこだわると、なかなかいい物件が見つかりません。それがコロナ禍の影響で、思いがけなく理想的なテナントを見つけることができたんです」

前田院長が大切にしている歯科医院のコンセプトは、「病院」がキーワードだ。口腔外科を専門とし、年間200本以上のインプラント手術を手がけている前田院長だからこそ、感染予防は当然ながら、精度の高い治療ができる機能が最優先だった。

また、コロナ禍のピーク時は、感染への不安から歯科医院への通院をためらう人も少なくなかった。そうした患者にも安心して通ってもらうために、どのような歯科医院であればいいのか、何度も図面を引き直したという。1階のテナン

トにこだわったのも、通院や困ったときに身近な印象を与え、すぐに入れる歯科医院でありたいとの思いがあった。

「45歳での開業ですから、開業医としては遅咲きです。大学病院の仕事はやりがいがありましたし、論文の執筆やスタディグループの講師など、毎日が充実していたので、開業はあまり考えていませんでした。でも、理想的なテナントとめぐり合い、このタイミングで開業するしかないと感じました」

高精細治療を可能にする 機能に徹した院内設計

オーラルデントクリニックは、自動ドアの玄関を開けると、正面に自動精算機を備えた受付がある。左手の待合スペースには、窓に面して背もたれのない長椅子が置かれている。そして、受付・待合スペースの両サイドに設けられたスロープから上がると、通路の片側に診療室に入るドアが並んでいる。患者は個室のような感覚で、ユニットがある診療室に入ることになる。

「患者さんと医療側の動線を完全に分けたかったので、歯科医院全体の中央に診療室を設け、その左右に患者さんが出入りする通路を設けました。患者さんのなかには、高齢だったり、持病を抱える方もいらっしゃるので、バリアフリーにもこだわりました」

ユニットは診療室の左右に2台ずつ置かれ、中央には大きなカウンターがある。このカウンターは、ナースステ



高いパーテーションで仕切った半個室のユニット



中央のカウンターがナースステーションの役割を果たす



ーションの役割を果たす。中央にあることで、病院の病棟のように、患者の申し送りなどがしやすい。

床面積を考えれば、もう1台ユニットを置くことも可能だったが、ゆとりのある半個室を優先した。その代わりに、カウンタールームの床下に配管を設け、将来的に1台増やせる準備はしている。

「スタッフルームと院長室も院内に確保しました。移動時間の負担をかけないことで、スタッフの働く環境も大切にしたいからです」

手術用の個室も充実している。最新の医療機器だけでなく、自動ドアにし、手洗い用の洗面台は個室の外に設置。前田院長が講師を務める勉強会のために、ライブ映像を手術用個室の外ユニットモニターから見学できるように、インフラも整備した。前田院長の長年の経験が活かした細部まで機能的な手術室になっている。

「私の診療方針の一つが、治療の精密化です。たとえば、CTやマイクロスコープは高精細な画像が得られる機種を選んでいきます。肉眼では難しい症例も、3次元的な精度で正確に診断し、最も効率のよい的確な治療をしたいから

です。治療成績がよいことは、結果的に患者さんの負担を減らすことにつながりますから」

広い視野で患者のQOLと 歯科の将来を考える

コロナ禍での開業となったオーラルデントクリニックだったが、患者数は順調に伸びた。以前から前田院長を頼っていた患者に加え、他の歯科医院や患者からの紹介、新しく歯科医院ができたことを知った近隣で働く患者など、幅広く患者が訪れたからだ。インプラントや口腔外科の治療だけでなく、虫歯や歯周病などの一般歯科の患者も多い。

現在、スタッフは勤務医が1名、矯正医が1名、歯科衛生士が2名、歯科技工士が1名、歯科助手が5名いる。勤務医は日本口腔外科学会認定医、矯正医は矯正歯科学会専門医、そして歯科衛生士の1人は、JSOIインプラント専門歯科衛生士の資格を取得している。前田院長にとって患者への手厚いサポートを支える心強い存在だ。



高精細の画像が得られるCT



歯科医院のサインもよく目立つ外観

「院長の立場になり、苦労したことは言い尽くせないほどありますが、一つ挙げれば、開業から3ヶ月くらいは予約管理が大変でした。多くの患者さんの来院はうれしい一方で、治療をお待たせすることにもなりかねません。優秀なスタッフのおかげで乗り越えられました」

前田院長のもとには、遠方からセカンドオピニオンを求めて来院する患者も少なくない。前田院長が心がけ、スタッフとも共有しているのは、歯科治療に対する患者の不安や不信感を助長する言葉は使わないということだ。治療にはさまざまな考え方があることを説明した上で、今の症状に適切な治療法を伝えるようにしている。

前田院長の視野が広いのは、日本口腔インプラント学会の専門医・代議委員として、後進を指導する立場であることが大きい。また、自身の経験も影響している。

口腔外科を学び始めた頃、前田院長はインプラントを否定していた。大学病院でトラブルになった症例を扱うことが多かったからだ。しかし、口腔がんの治療に携わるようになり、考えが変わっていった。

口腔がんは病巣を残さないため、顎から舌まで下顎の大部分を切除することになる。その後の生活のために、インプラントを用いた再建手術が必要だ。

「命を取り留めても、食事を十分に摂れない生活になるのでは、患者さんのQOLを下げてしまいます。食事や会話もできる生活にすることが、本当の治療です。機能再建に関

心を持つようになってから、インプラントの重要性に気がついたので」

前田院長は、「歯科医院は困っている人を困らない状況にする場所である」ことが信念の基本にある。その上に「医学的根拠に基づかない治療は行わない」「精度の高い治療を提供し、患者さんに無用な負担を与えない」ことを治療方針としている。

「あの歯科医院は最後の砦だね、と患者さんに頼られる存在になりたいと思っています。最近、常勤の先生が加わったので、今後はコロナ禍と開業で控えていた海外の学会への参加を復活させる予定です。最先端の歯科を学び、治療に反映させるのはもちろん、日本の先生方にお伝えする機会を積極的に持ちたいと考えています」



前田 貢院長(中央)と、スタッフのみなさん

PROFILE

前田 貢 先生

- 2004年 北海道医療大学歯学部卒業。東海大学医学部付属病院 口腔外科に入局 ●2005年 東京慈恵会医科大学附属病院 歯科口腔外科教室に入局。富士市立中央病院麻酔科に入局 ●2021年 オーラルデンタルクリニック開業 ●日本口腔インプラント学会専門医・倫理審査委員会委員・代議委員 ●国際口腔インプラント学会専門医 ●日本顎咬合学会認定医
- International Dental Implant Association(IDIA)指導医 ●Academy of Osseo Integration Active member(AO)
- Osseointegration Study Club of Japan(OJ)Active member ●Universal Implant Researchers 倫理審査委員会委員
- Dentsply Sirona Astratech Implant system Instructor ●Dentsply Sirona Simplant Instructor

オーラルデントクリニック 東京都港区新橋6丁目17-17 御成門センタービル 1F TEL:03-6432-4540 HP:<https://odc-cl.com/>

Astratech Implant System EVを使用した 審美領域のインプラント治療

症例データ 1

Socket Shield Technique (SST) を用いた審美領域のインプラント治療

患者 プロフィール

患者は35歳の男性。
上顎右側中切歯（以下1）の動揺と審美性の回復を主訴に当医院に来院した。

治療方針・計画

1はCEJ直下の水平的破折により動揺度はI度～II度で変色がみられた。約20年前に当該部位の殴打により感染根管治療の既往があった。X線を含めた検査・診断と主訴である審美性の回復を勘案し、SSTを用いたインプラント治療にて機能再建することを計画した。

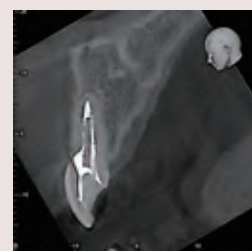
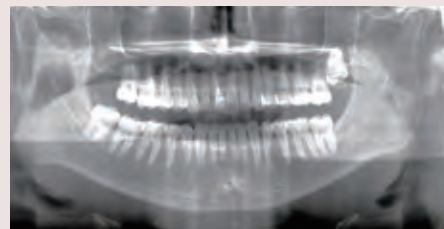
審美領域のインプラント治療は、硬軟組織の解剖学的制限に加え、天然歯喪失後の生理学的変化を考慮しなければ良好な結果は得られない。つまり現存する硬軟組織の状態を正確に把握し治療計画を戦略的に構築する必要がある。1の対咬関係はバーティカルストップの安定しているI級であり、硬組織は歯槽骨形態、唇側骨の厚み、Primary Stabilityの予測、軟組織はフェノタイプや状態、歯冠部のコンタクトポイントの最根尖側から歯冠部歯槽骨頂までの距離（Interproximal Height Bone:IHB）を考慮した上で、抜歯即時埋入を計画した。冒頭で挙げた抜歯後の生体変化を予測すると、硬軟組織のグラフトを勘案するべきだが、1の内部吸収からみられる根管の閉鎖、唇側歯根膜腔の消失から唇側歯根の骨性癒着を予測し、唇側歯根を残すPartial Extraction Therapyを適応しSSTを応用することで生体変化に対応することとした。また、現存する唇舌側骨頂のレベリングの誤差は、アストラテックインプラントシステムEVのプロファイルインプラントをデジタルガイドドサージェリーによって、適切なレベリングと深度へ埋入することで対応し、最適なエマーゼンスプロファイルを構築することとした。最終補綴装置は、歯肉色を考慮したアトランティスアパットメント（Gold-Shade）にZセラミッククラウンをスクリュー固定式にて装着し、現在も審美性を具備した良好な状態を維持している。

まとめ

審美領域のインプラント治療は、解剖学的考察、生理学的考察を考慮した最適な治療計画とマテリアルのすべてが揃うことで最良の結果を獲得する。SSTの活用は審美領域のインプラント治療にとって良好な結果をもたらす、長期持続性を見据えた生理学的変化を克服する最適な手法と考えている。

1

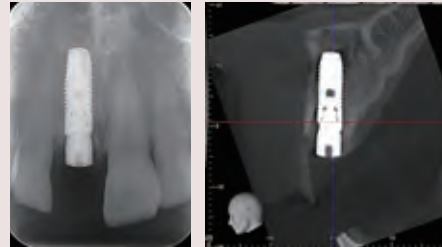
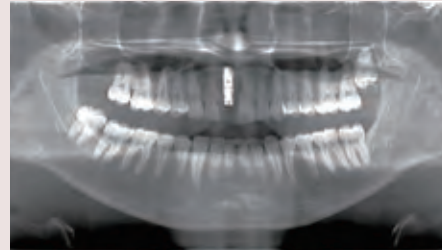
初診時の口腔内写真とX線写真。1の歯軸の不調和と不良なレジン修復を含めた顕著な審美障害が見られる。CBCTより唇側歯根膜腔の消失と水平的破折が確認できる。





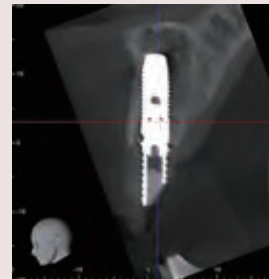
2

インプラント埋入直後の口腔内写真とX線写真である。唇側歯質をU-shape状に残したSSTは、CBCTによっても確認できる。唇舌的な解剖学的高低差は、プロファイルインプラントによって対応する。



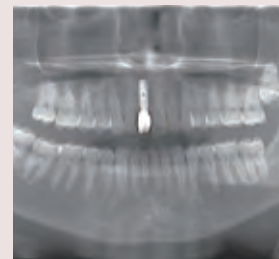
3

最終PVRにてFacial gingival lineをSculptingした状態と、CBCT画像である。PVRをS字状に構築し、Gingival flow lineを整えた。



4

最終補綴装置装着後の口腔内写真とX線写真である。左右シンメトリーに整えられたFacial gingival lineの維持は、SSTによる唇側骨の温存と軟組織の幅、そして適切な埋入ポジションによってもたらされる。



症例データ 2

硬軟組織のグラフトを施した審美領域のインプラント治療

患者
プロフィール

患者は25歳の女性。
上顎右側中切歯（以下1）」の動揺と審美性の回復を主訴に当医院に紹介来院した。

治療方針・計画

1」はCEJ直下の水平的破折から動揺度はII度で変色がみられた。また、唇側の硬軟組織は大きく裂開しており、X線を含めた検査・診断と主訴である審美性の回復を勘案し、硬軟組織のグラフトを併用したインプラント治療を計画した。

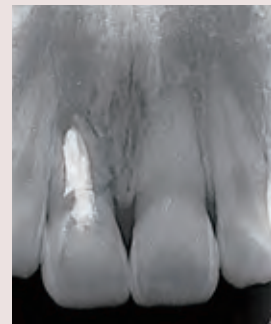
本症例は、1」の硬軟組織の大きな裂開を認め、全顎的に軟組織のフェノタイプは薄く、インプラント治療を計画するには大きなリスクを伴った症例であった。インプラント治療前にスキファオールドの確保は必要不可欠であり、硬組織マネジメントとして、i) 抜歯後のソケットプリザベーション、ii) Ti-meshを用いたGBRを施行した。6ヶ月後、硬組織の水平的・垂直的幅径が担保されていることを確認し、デジタルガイドドサージェリーにて、適切な3次元的ポジションへインプラントを埋入した。使用したアストラテックインプラントシステムEVIは、埋入後の骨吸収を抑制し、治療計画をスムーズに遂行する材料である。およそ3ヶ月の免加期間を経てオッセオインテグレーションの獲得後、軟組織マネジメントとしてi) 口蓋粘膜を採取したCTG (Single Incision Technique)、ii) マイナーロールテクニックを施行した。2ヶ月後、補綴装置の許容可能な軟組織の水平的・垂直的幅径が担保されていることを確認後、インプラント支持のPVRIによってFacial Gingival Levelの調和を図り、最終上部構造装置へ移行した。最終上部構造装置は、歯肉色を考慮したアトランティスアバットメント (Gold- Shade) にZrセラミッククラウンをセメント固定式にて装着し、現在も審美性を具備した良好な状態を維持し機能している。

まとめ

リカバリー要素を含めた本症例は、現症の正確な診断、解剖学的考察をベースとした硬軟組織のバイオロジー、インプラントの材質、形状、埋入ポジションなどゴールを設定した上で、確実なステップバイステップの構築が必要であり、つねに想定外を意識した治療計画が重要である。

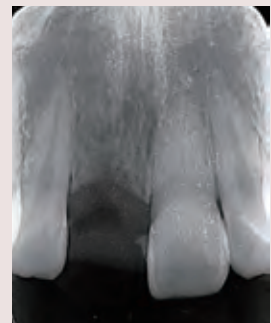
1

初診時の口腔内写真とデンタルX線写真である。水平的破折線のほか、根尖相当部の開大が見られる。また顕著な変色を呈している。



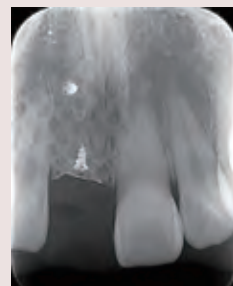
2

抜歯・ソケットプリザベーション後の口腔内写真とデンタルX線写真。5-0ナイロン歯にて水平マットレス縫合と単純縫合を施した。



3

GBRはBio-ossを使用し、隔壁確保のためのTi-meshを固定後、遮断膜として吸収性メンブレンを6-0モノクリル糸にて結合組織と固定する。術後の裂開防止のため減張切開を細部まで施し5-0ナイロン歯にて縫合した。



4

GBR経過6ヶ月後、インプラント埋入を施行。隔壁通りの硬組織の増生が見られる。切歯管の張り出しが強いため、デジタルガイドドサージェリーにて精密に埋入した。



5

インプラント埋入3ヶ月後にCTGを施行した。審美性を考慮して繊維組織の少ない口蓋粘膜を採取し、Inlay graftをSingle Incision Techniqueによって行った。



6

臨在歯との調和を図るため、マイナーロールテクニックを用いて水平的軟組織のボリュームをさらに確保した。その後PVRIにてFacial gingival lineを整えた。



7

最終補綴装置装着時の口腔内写真とデンタルX線写真。硬軟組織共に良好な経過が観察できる。



THE 9th WORLD DENTAL SHOW 2023 in YOKOHAMA

Welcome to SASAKI Booth

歯科医療の最新情報はここに集まる。



2023

9.29 [FRI.] / 30 [SAT.] / 10.1 [SUN.]

SASAKI SPECIAL SEMINAR

SASAKI SPECIAL SEMINAR

12:00~19:00

9:00~19:00

9:00~17:00

▶ 会場：パシフィコ横浜 展示ホール SASAKIブース A-16

2023年9月29日(金)～10月1日(日)、パシフィコ横浜にて「ワールドデンタルショー2023」が開催されます。

SASAKI展示ブースに於いて、歯科医療の最新情報のご紹介、

ならびに、現在第一線で活躍中の講師陣を招き「ササキスペシャルセミナー」を同時開催いたします。

みなさまのご来場を心よりお待ちしております。

同時
開催

SASAKI SPECIAL SEMINAR

第一線で活躍中の講師陣を招いての「ササキスペシャルセミナー」同時開催!



丸橋 理沙 先生

歯科衛生士の働き方
自己実現と患者さんへのアプローチ



石井 宏 先生

「根管形成」
-MIな根管形成とそれを可能にする最新の機器や材料-
「根管充填」
-MIな根管充填とそれを可能にする最新の機器や材料-



内田 宏城 先生

保存不可能な歯への挑戦
Nd:YAGレーザーを用いて



前田 眞 先生

Essence of Astratech Implant system EV
-Introduction Clinical Case-



渥美 克幸 先生

withコロナ時代の
歯科診療所における感染制御



<https://www.sasaki-kk.co.jp>

SASAKI Care & Communication Vol.61 September 2023 お問い合わせ・ご意見:「C&C」事務局 細谷俊寛

FAX 0120-566-052 <https://www.sasaki-kk.co.jp>

発行:ササキ株式会社 東京都文京区本郷3-26-4 ササキビル4F

●本誌に記載された個人の氏名・住所・電話番号等の個人情報の悪用を禁じます。●本誌の記事・写真・図版等を無断で転載・複製することを禁じます。